■ フォト・エッセイ ■

インドネシア・ジャワ中部地震の被災地から

写真・文
今岡昌子
Masako Imaoka

ジャワ中部地震の被害に遭った、陶器の店にて

畑わきの道から奥へ突き進むと、熱帯樹木や竹が勢いよく茂る、緑に囲まれたのどかな村があった。レンガ造りの家屋がゆったりとした間隔で建ち並ぶ。だが、そこには驚くべき光景が広がっていた。壁のレンガが至る所でバラバラに崩れ、家屋の多くが激しく倒壊していたのだ。

今年五月末、ジャワ島を震源にマグニチュード（M）六・三の地震が発生したインドネシアの被災地。市内から車で三〇分程行った、ジョグジャカルタ市内で民宿を営む三〇代男性アントンさんの自宅へ。バントゥル県ムリアン村を訪ねた。

伝統的なジャワ建築様式の三角屋根の建物が骨組みの一部を失って崩れている。普段から言葉数の少ないアントンさんが、こう沈黙を破った。

「庭の池に観賞用の魚を多数飼っていましたが、地震後、近所の人々がその魚をすくって食べました。仕方がないです」。

地震発生の直後、被害に遭った自宅へは戻らず、民宿で寝起きしていたアントンさん。どうやら事態を把握した当時に記憶を逆戻りさせた様子だ。村は、地震発生から一週間、食糧の入手が困難なサバイバルな時期をむかえたと教えてくれた。

とはいえ、地震発生から二週間弱の頃には、町へ出れば商店はいくらでもあった。被災者は経済的な理由から買い控えせざるを得ないのだ。

「必要なのはまず食料品。そして雨季が

バントゥル県ムリアン村に住むスンダリさん（20）は、地震でケガを負った母に代わり家事を引き継いでいた

支給されたインスタントラーメンを均等に分ける村人たち

インスタントラーメンを調理する女性たち

来る前にテント、物を入れるバスケットや毛布、せっけん、調理に使うコンロとフライパンが欲しいです」。

大学で経済学を学ぶ女学生スンダリさん（二〇歳）は、地震でケガを負った母に代わり家事を引き継いでいた。また地震直後身体が弱ってテントの中で寝たきりになったお祖母さん（推定一〇〇歳）の面倒も見ていた。学校での授業以外、家事に追われる日々を過ごす毎日だ。

「井戸水を沸かして飲んでいます。毎度インスタントラーメンも辛い」。

妻と二人暮らしの男性、デジョウィヨノさん（七七歳）もまた悲鳴の声を上げた。村人は皆、日二度の食事を村に設けられた災害時連絡所「ポスコ」からの支給に頼っていた。被災者自らによる炊き出しメニューや支給された食糧といえば、インスタントラーメンだった。ラーメンは持ち運びやすく、多数の被災者への配給が可能だった。だがベストな選択であったのだろうか。

私はかつて、地震による被災地を幾つか訪れている。発生から二週間後には、政府の要請を受けた国連など支援団体が中枢的な機能を果たし、テントや食糧の配給を行い、被災家庭に行き届くというケースを見守った。パンを主食とする国では小麦や油、砂糖などが配給される。

このジャワ中部地震では、支援物資が必ずしも被災家庭へ均等に行き届いていないようだ。他の被災地域も多数訪ねたが、食

仮設住宅で日々を過ごす村人

日没後の、バントゥル県ムリアン村にて

被災地の幹線道沿いで、子供たちが物乞いをしていた

PHOTO ESSAY

インドネシア/Indonesia

糧に限らず物資の支援にバラツキがあり、特にローカルの団体からの支援物資の内容は貧弱で、最低限度の生活を強いられる被災者が多数存在する。

地震発生から約三週間後になってようやく、地方政府から、被災家族に一カ月あたり米一〇キロと一人あたりの義援金九万ルピア（約一一〇〇円）が支給された。が、この支給額は決して十分ではなく、しかも期間は僅か三カ月間のみ。働き手の男性を失った、病人を抱える家庭では、生活の厳しさに拍車がかかっている。

この頃、ムリアン村では午前中、村の男性たちが、近所数軒でグループを組み、各家々の瓦礫の撤去を行っていた。被災者が自ら、崩れかけた家によじ登りハンマーで叩いた。村の周辺に自生する竹を切っただけの長い竹棒で、レンガ造りの建物を満身の力を込めて突き壊す、勇ましい男性の姿もあった。作業車を必要としない理由は建物が極度に脆弱に造られていたためだ。

インドネシアの建築基準では、耐震強化のためにレンガ構造の建物にはある間隔でコンクリート層の補強が必要とされるが、そのコンクリート層がない家屋すらあった。このような建物は全壊してしまうケースが多い。極度に揺れに弱いのだ。

しかもレンガを接着させるためのモルタル部分にセメントのないもの、量の少ないものさえ見かけた。手を触れてみると、クッキーのごとくボロボロと崩れてしまう。

瓦礫の撤去作業は高度な作業機器が使われず、また素手で行われるケースが少なくはない

被害を受けた家から家具を運ぶ村人たち

被災者が自ら、被災に遭った自宅を取り壊していた

さらに地中に築く地盤に高さがないものもあった。このような欠陥構造は、建築技術の不足に加え、経済事情からと言われている。地震が起こることを前提にしない現状はいかがなものだろう。

「他の村に住む妻の妹は家屋の下敷きになり死亡しました」。

瓦礫撤去のため、炎天下で働いていた前述の男性デジョウィヨノさんは悲しげにそう語った。

住宅再建への道としては、インドネシア政府による一般家庭への再建資金の援助はまだ先延ばしになっているものの、地元のガジャマダ大学を中心にネットワークが構築されつつある。

近年、インドネシアでの災害が短い周期で頻発している。スマトラ沖大地震および津波（二〇〇四年一二月末）、ニアス島大地震（二〇〇五年三月）、ジャワ中部地震（二〇〇六年五月）、ジャワ島南岸津波（二〇〇六年七月）。国際社会に支援疲れがあり、NGOのマネージメントも厳しい状況になっている。メディアで取り上げられる割合も関心度の高いニュースに押されて少ない。

早くも見放された様相を漂わせていた被災地。被災者は地震発生から時が経つにつれ、将来への不安感からストレスに悩まされている…。

（いまおか　まさこ／写真家）